

平安宮漆室跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 二 一 四

平安宮漆室跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平 安 宮 漆 室 跡

2002年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しております。また、平安京遷都以来今日に至るまで都市として永々と生活が営まれてきており、各時代の生活跡が連綿と重なり合っています。都であるゆえに、そこから発見されるその一つ一つは、日本の歴史を語るうえで欠くことのできないものとなっています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした遺跡の発掘調査を通して京都の歴史の解明に取り組んでおります。その成果を市民の皆様幅広く公開し活用いただけるよう進めていくことが研究所の責務と考えております。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、出土遺物の小・中学校や公的施設での貸出展示、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところであります。

さて、当研究所では従来各年度毎で報告してまいりました「京都市埋蔵文化財調査概要」を改め、平成13年度調査分より各調査箇所毎に1冊の報告書として発刊しております。その第4冊目として、このたび仁和老人センター建設に伴います平安宮跡の発掘調査の成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援をたまわりました関係者各位に対して、厚くお礼ならびに感謝を申し上げます次第です。

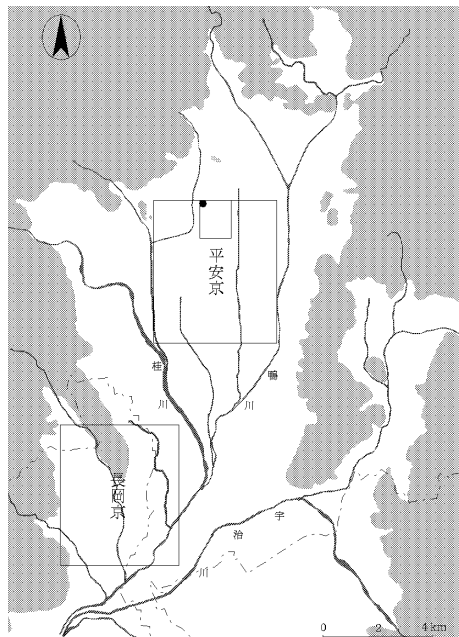
平成14年9月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安宮漆室跡
- 2 調査地点所在地 京都市上京区御前通一条下る東豎町132-1 (仁和小学校)
- 3 委託者及び承諾者 京都市 代表者 京都市長 梶本頼兼
- 4 調査期間 2002年1月21日～2002年2月27日
- 5 調査面積 約120m²
- 6 調査担当職員 大立目 一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図 (縮尺 1 : 2,500) 「聚楽廻」を参考にし、作成した。
- 8 使用方位・座標値 使用測地系 日本測地系 (改正前) 平面直角座標系 (ただし、単位 (m) を省略した)
- 9 使用標高 T.P. : 東京湾平均海面高度 (座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した)
- 10 遺 構 番 号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 11 遺 物 番 号 挿図の土器類・土製品・石製品の順に通し番号を付した。
- 12 掲 載 写 真 村井伸也・幸明綾子
- 13 作成担当職員 大立目 一
(調査地点図)



目 次

1 . 調査経過	1
2 . 周辺の調査	2
3 . 遺 構	2
4 . 遺 物	5
(1) SK 1 出土の土師器・土製品	6
(2) SK 1 出土の施釉陶器類	6
(3) SK 1 出土の伊万里染付	7
(4) SK 1 出土の石製品	9
5 . ま と め	10

図 版 目 次

図版 1 遺構	1 調査区全景 (西から)
	2 SK 1 石造物出土状況 (南から)
図版 2 遺構	1 宮の大垣推定線付近瓦出土状況 (北から)
	2 SK 6 上面瓦出土状況 (北から)
図版 3 遺物	1 SK 1 出土 土師器・土製品
	2 SK 1 出土 施釉陶器類
図版 4 遺物	1 SK 1 出土 伊万里染付
	2 SK 1 出土 石仏
	3 SK 1 出土 石仏
図版 5 遺物	1 SK 1 出土 石仏
	2 SK 1 出土 五輪塔
	3 SK 1 出土 法塔の宝珠・請花
	4 SK 1 出土 法塔の軸部

挿 図 目 次

図 1 調査位置図 (1 : 2,500)	1
図 2 調査前全景	2

図3	調査風景	2
図4	周辺調査区配置図	2
図5	調査区実測図(1:100)	3
図6	SK1平面図(1:40)	4
図7	SX19B南壁断面図(1:50)	5
図8	SK1出土土師器・土製品実測図(1:4)	6
図9	SK1出土施釉陶器類実測図(1:3)	7
図10	SK1出土伊万里染付実測図(1:3)	8

表 目 次

表1	遺構概要表	5
表2	遺物概要表	9

平安宮漆室跡

1. 調査経過

調査地は、京都市上京区御前通一条下る東豎町の京都市立仁和小学校グラウンドの北西端に隣接し、平安宮の北西隅に該当し、漆室司など官衙の一角に推定される場所である。今回、京都市保健福祉局による仁和老人センター建設の計画が持ち上がり、発掘調査を実施する運びとなった。これまでの同校内調査は3回実施され、江戸時代の井戸、土壇、墓、土取穴、並びに平安時代から桃山時代の土壇などが検出されている。今年度の調査では当調査地内に平安宮の西限大垣推定線が南北に通る事から、宮の西限大垣、及びそれに伴う溝、築地跡などの検出が主な調査目的となった。

調査区は、敷地内の北部と南部に仁和小学校の給食室等が設置されていた事から、北部と南部は遺構の残存している可能性がほとんどないと判断された。このため中央部に東西15m、南北8m、総面積120㎡のトレンチを設定し調査を行った。

調査は2002年1月24日から重機掘削を開始した。掘削の結果、調査区中央に東端から西へ中央部付近まで続く南北3.5m、東西8m以上の防火水槽が敷地内直下に深く埋設されている事がわかった。これは、調査前には確認されていないもので、調査にとって大きな弊害を及ぼすものであった。また周辺も小学校建設時の造成により大規模に遺構面が削平されている状態であった。その結果、遺構として残存していたものは非常に少なく、江戸時代後期にかけてのものと思われる

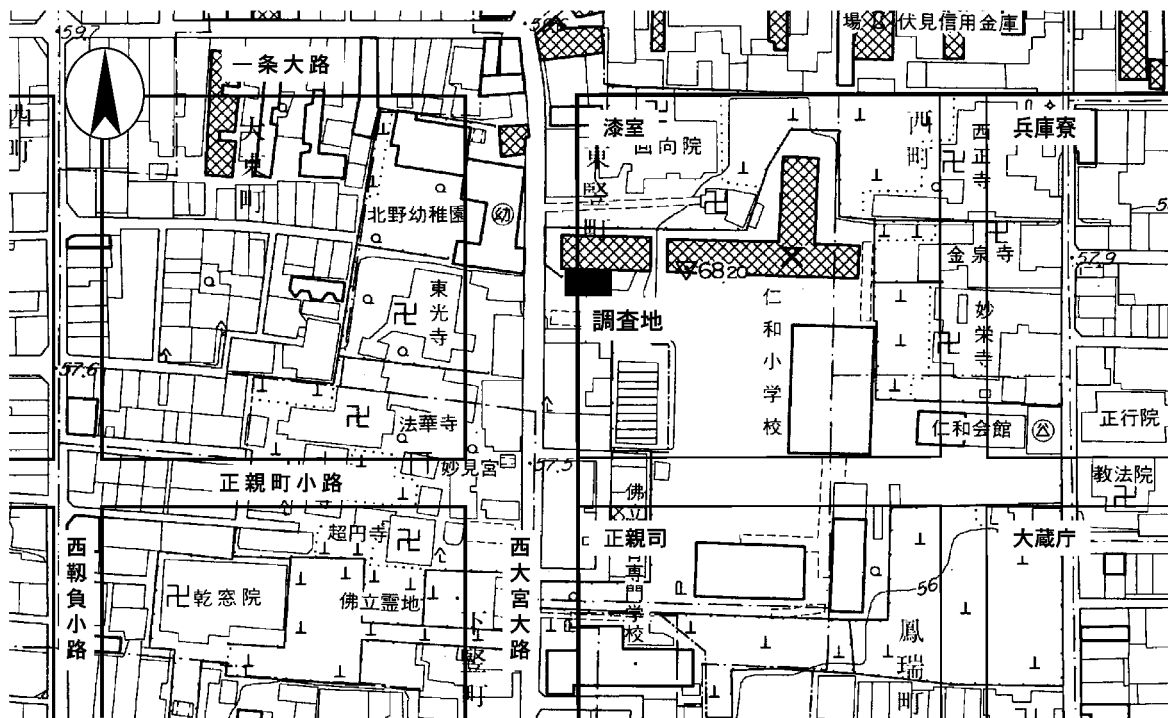


図1 調査位置図 (1 : 2,500)



図2 調査前全景



図3 調査風景

井戸と推定される土壌、平安時代前期の土器類が混入する規模の大きな南北方向の土壌を検出したにとどまり、当初予定していた宮西限の大垣、それに伴う遺構、中世の遺構等は検出できなかった。調査は2002年2月27日を以て終了した。

2. 周辺の調査

調査地周辺で行われた、これまでの主要な発掘調査の成果は、以下の通りである。

同校内の発掘調査は、1977年（昭和52年）に第1回目が行われている¹⁾。調査成果としては、江戸時代後期以降の井戸、土器溜め状土壌を検出しているが、平安時代の遺構は検出できなかった。1986年（昭和61年）の第2回調査²⁾でも、江戸時代の土取穴と墓を検出しているが、同じく平安時代の遺構は検出できなかった。1998年（平成10年）第3回の調査³⁾も、上記したものと同様に桃山時代から江戸時代のピット、土壌、土取穴を検出したにとどまっていた。

また、今年度の調査でも主要な目的の一つとなった宮の西限大垣、及びそれに伴う溝の検出では、平安宮西限を対象とした1978年（昭和53年）の正親司跡の調査⁴⁾、1985年（昭和60年）⁵⁾・

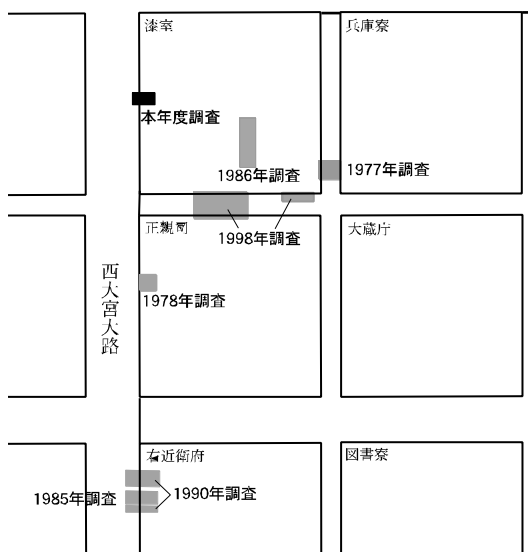
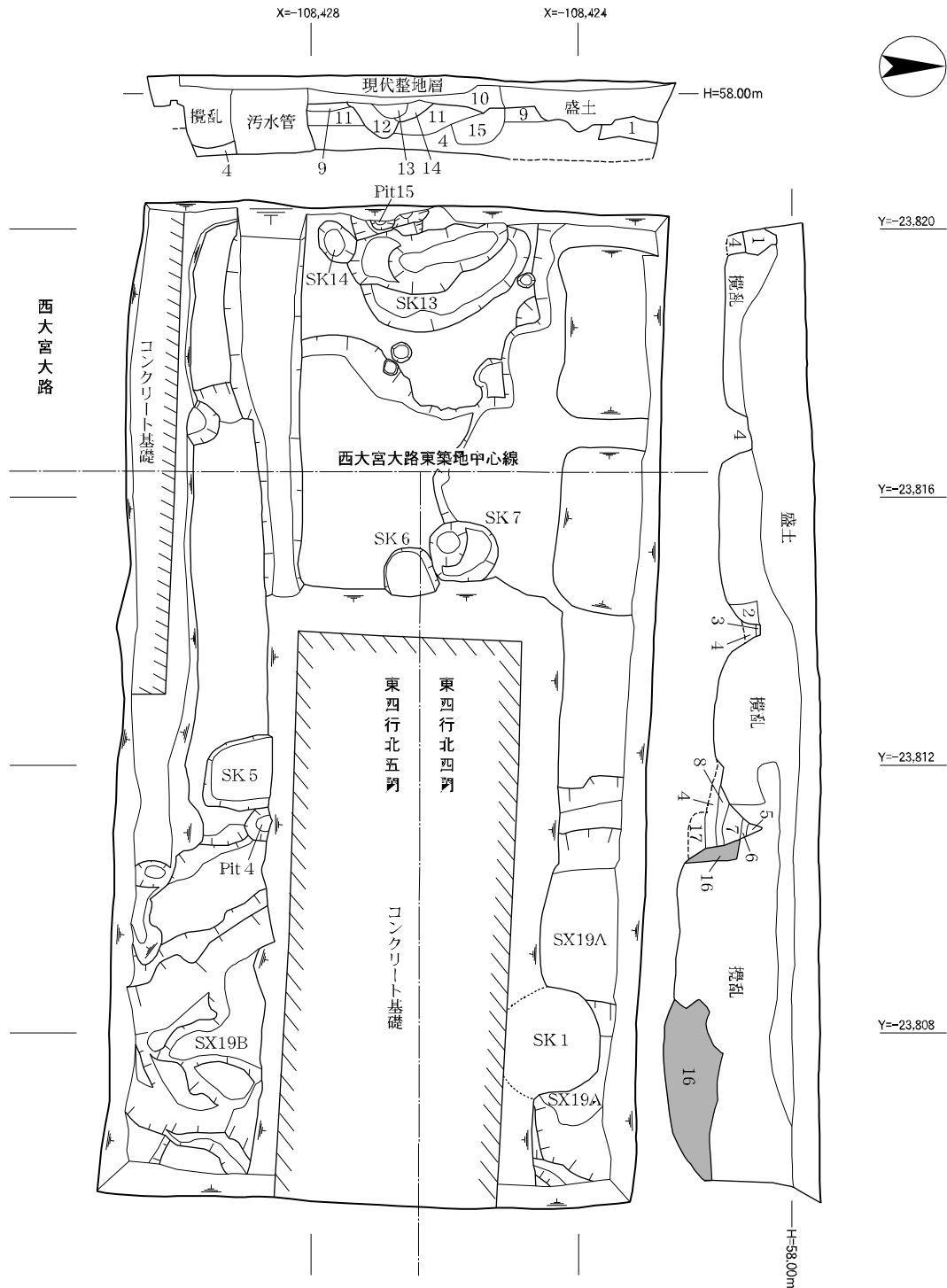


図4 周辺調査区配置図

1990年（平成2年）の右近衛府跡の調査⁶⁾がある。それぞれ南北方向の溝を東西に数状検出しており、これらはいずれも平安時代前期から後期に至る平安宮西限大垣の外溝とみられる。

3. 遺構

宮の西限大垣に関する隄、築地跡、路面、建物跡等の検出が期待されたが、小学校造成時に大規模な攪乱を受け遺構などが削平されていることが、重機掘削後に判明した。上記した1978・1985・1990年の調査において見つかった宮の西限大垣にかか



- | | |
|---------------------------------------|---------------------------------------|
| 1 10YR 2/1 黒色砂泥 | 9 10YR 5/6 黄褐色砂泥 (地山) |
| 2 10YR 3/3 暗褐色砂泥 | 10 10YR 2/3 暗褐色砂泥 (攪乱を受けた土) |
| 3 10YR 5/6 黄褐色砂泥 (地山) | 11 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ5~10cmの礫多分 (地山) |
| 4 2.5YR 4/3 オリーブ褐色砂礫、φ5~20cmの礫多分 (地山) | 12 10YR 2/3 黒褐色砂泥 |
| 5 10YR 4/4 褐色砂礫 (地山) | 13 10YR 3/2 黒褐色砂泥 (Pit15) |
| 6 10YR 6/6 明黄褐色粗砂 (地山) | 14 10YR 3/3 暗褐色砂泥 |
| 7 10YR 4/4 褐色砂礫 (地山) | 15 10YR 5/6 黄褐色砂泥、小礫を含む (地山) |
| 8 10YR 4/4 褐色砂泥、しまった土 (地山) | 16 10YR 1/2 黒褐色砂泥 (断面に残存するSX19Aの埋土) |
| | 17 10YR 5/6 黄褐色砂礫 (地山) |

0 5m

図5 調査区実測図 (1 : 100)

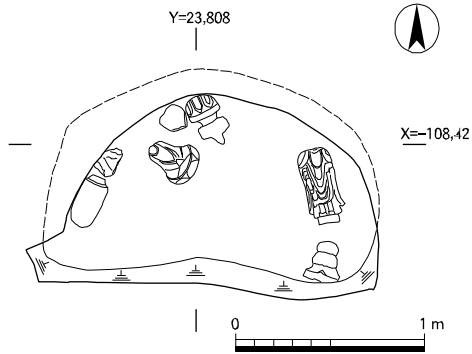


図6 SK 1 平面図 (1 : 40)

わる隍である南北方向の溝は、築地推定線から西約 8 m に数条並ぶ状態で検出されているが、これを延長すると調査区の敷地入口付近に相当し、調査区外にあたるために溝を確認することはできなかった。

調査地の基本層序から述べる。現地表面の標高は 58.40m で、基本土層 (中央部) は地表面より - 30cm (標高約 58.10m) が現代整地層、- 30 ~ 120cm (標高約 57.20m) が黒褐色砂泥の現代盛土層、および攪乱層となり、直下が黄褐色砂泥 (聚落土)、オリーブ褐色の砂礫 (径約 10 ~ 15cm) の地山層となる。

地山の堆積は南北にほぼ平坦な状態であった。

調査区西端においては重機掘削時に暗褐色砂泥系の土層を地表下 - 30cm (標高約 58.00m) で検出した。近世の遺物を包含し、江戸時代の整地層と推定していたが、ガラ等が混入することから小学校造成時の攪乱された土層と確認した。その下層の黄褐色砂泥の地山に切り込んで、SK13・14を検出したが遺物は全く出土せず、埋土の様子から同じく攪乱土壌の可能性が高い。また、調査区の西壁際で Pit15 を検出した。埋土は黒褐色砂泥 (粘質) で少し古い土質の様相を呈していたが、西半部は調査区外のため確認はできなかった。同じく遺物はまったく検出できなかった。以下検出した主要な遺構について述べる。

SK 1 (図 6)

調査区の東北隅部で、地表面より約 - 1.4m (標高約 57.00m) において、素掘りの井戸と推定される土壌を検出した。出土遺物から江戸時代後期 (18世紀前半 ~ 19世紀) にかけてのものと思われる。形態は、検出面上端で径約 1.8m で、南半は防火水槽により大きく削平を受けていたが、ほぼ円形を呈するものと思われる。土の堆積状況は黒褐色砂泥層が検出面より - 2.3m (標高約 54.70m) まで続く。しかし、この辺りから土壌の西壁にあたる地山砂礫層が崩れはじめ、遺構位置がトレンチの北壁際であることもあり、これ以上の掘削は危険を伴うと判断し、安全面から掘削は中止するに至った。最終確認のためにボーリングステッキで下層の埋土状態を調べたところ 1.0m 以上は黒褐色砂泥層がまだ堆積する事がわかった。遺物は黒褐色砂泥層に多く混入しており、井戸を埋める時に破棄されたと思われる雑器類、棧瓦類が出土している。また検出面から - 1.5m 辺りで五輪等、石仏、法塔などが破棄された形で出土した。なお井戸の構造物等 (石組、木枠) は検出はしていない。

Pit 4 ・ SK 5 ~ 7

調査西部の防火水槽西端に位置する辺りで、SK 6・7 を検出した。どちらも東半部を防火水槽の掘形に削平を受けていたがおそらく、ほぼ円形を呈する。径 0.9 ~ 1.0m の規模を有し、深さは 0.3m あった。SK 6 は検出時に、多くの平安時代の瓦が混入している事、また西大宮大路東築地中心線の東に隣接する事などから、当初、平安時代の宮内敷設の Pit 等と推定していたが、下層から江戸時代の土師器、施釉陶器、染付などの小片を微量出土し、江戸時代後期 (18世紀後半頃 ~ 19

世紀)の遺構と判断するに至った。SK7も同じく江戸時代の土師器、施釉陶器、染付の小片を微量出土し、同時期のものであると思われる。調査区中央部の防火水槽の南端でPit4・SK5を検出した。上記したのと同じく近世の土壌で、時期も大きく変わらないものである。

SX19(図7)

調査区東部で、落ち込み状の遺構SX19A(北部)・SX19B(南部)を、地表下-1.4~1.5m(標高約57.00m)で検出した。土質がきめ細かい黒色砂泥層(黒墨土)を埋土とする。形態は、調査区を南北にまたがる規模のやや大きなもので、中央部は防火水槽で削平されていた。SX19Aで幅約5m、深さ約0.9m(標高約56.10m)、SX19Bで幅約1.8m、深さ約0.6m(標高約56.60m)。東西両肩は南端付近で幅がすぼまっていき遺構の南限は南壁以南にある。また北限は北壁断面で一部埋土を残しながら大部分が攪乱を受けてはいたが、東西両肩が残存していたので以北にも延長していたと推定される。埋土堆積状況から、SX19A・SX19Bは南北に続く同一の遺構であると想定できる。遺物は平安時代前期の土師器、須恵器などの小片が混入していたが非常に微量であった。上面清掃中に18世紀の土師器小片を採取、掘削途中に近世塩壺片と思われるものを採取しており、近世に土を動かされた可能性があり、近世の落ち込み状遺構としておきたい。

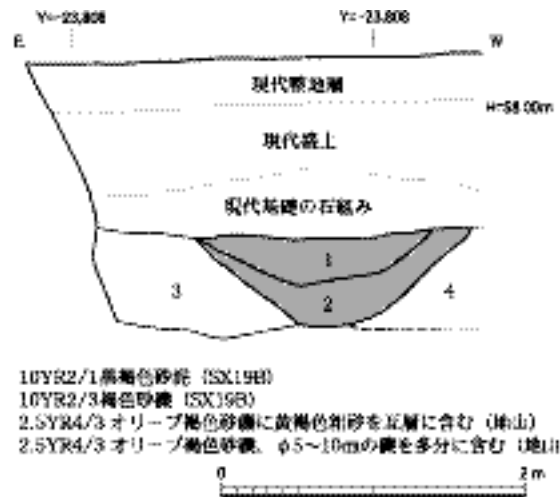


図7 SX19B南壁断面図(1:50)

表1 遺構概要表

時 期		遺 構
江戸時代後期	XIII期	SK1・5~7・13・14、 Pit4・15、SX19A・B

4. 遺 物

平安時代から江戸時代の遺物を整理箱にして16箱分出土した。遺物の大半は井戸と思われるSK1から出土した江戸時代後半期の瓦類と、国産施釉陶磁器の日用雑器類である。内容は土師器は皿、火入、焙烙と、いずれも小片、細片であった。国産施釉陶磁器は伊万里染付(椀皿鉢類、蓋類、香炉、仏飯器)、唐津焼(刷毛塗り椀、鉢)、京焼、京・信楽系(椀皿鉢類、蓋類、鍋類、土瓶、急須、瓶類、壺類、甕類、灯明皿、軟質施釉陶器)などがある。焼締陶器には備前、信楽、丹波(播鉢、壺類)、関西・堺系(播鉢)があり、備前、丹波の播鉢に関しては時期を17世紀頃までに遡るものである。

また、下層より石製品で五輪塔(2個体)、法塔の軸部にあたるもの(1個体)、笠塔婆の宝珠にあたるもの(1個体)、石仏(3体)などが出土している。その他、銅製品のキセル片、土製品

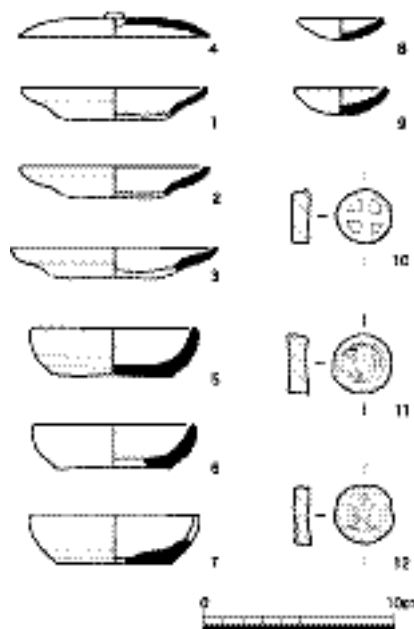


図8 SK 1出土土師器・土製品
実測図(1:4)

の泥面子、伏見人形なども出土している。

中世の遺物は東播系須恵器鉢、甕などで、平安時代の遺物は須恵器杯、土師器杯蓋、灰釉陶器、黒色土器で、いずれも小片で微量あった。

以下この項では、図示したSK 1出土遺物について、概述しておく。なお出土遺物の時期編年は、平安京・京都～戡期編年案⁷⁾に準拠することにする。

(1) SK 1 出土の土師器・土製品(図版3、図8)

1～3は土師器の白色系の皿で口径が9.8～10.0cm台、器高が1.6～1.7cm台、体部は緩やかに外反して開き、口縁部を内弯気味に端部を内へ収める形態を持つ。内面周縁には圈線が巡るものである。内面底部および口縁部内外面をナデ、外面底部はオサエを施す。4は土師器のつまみの付く蓋である。口径は約11.0cmで体部はやや広く開き口縁部に至る。調整は皿と同様である。5～7はロク口成形された土師器の鉢である。胎色はにぶい黄橙色を呈し、胎土は硬質である。内面底部、口縁内外面をロク口ナデを施した後に回転糸切りで切り離す。5には底部に糸切り痕が顕著に残存する。

8・9は土製品の丸底小皿である。型押し成形され、内面には離れ粉か、装飾的な意味合いからか雲母が多分に付着する。10～12は土製品の泥面子である。上面を型押し模様を施し、側面をナデ、底部はオサエ。模様はそれぞれ「兵」「十字」「狐」を描かれる。時期年代は江戸時代後期の戡期(18世紀前半から19世紀)の時期幅を想定している。

(2) SK 1 出土の施釉陶器類(図版3、図9)

13～19・24は京焼・信楽系の施釉陶器である。13は天井部にオリーブ黄色の釉を施釉した、つまみの付かない蓋である。施釉は天井部全体に施され、内面および返り部は露胎を呈す。14は土瓶の落とし蓋である。つまみは欠損している。灰白色の緻密な胎土に外面は暗褐色砂泥の鉄釉が施釉されて、内面は露胎である。15は小型の灯明皿である。内面中位に鋭角的な三角形の凸帯を持ち、口縁部にヘラで凹をつける。乳白色の施釉が内面にのみ施され、外面は露胎で口縁端部には焼成時の化学変化により赤褐色の帯が巡る。16もやや大型の灯明皿である。口縁部は欠損しており、内面中位に内弯気味の凸帯が付く。内面に淡黄色の釉がやや厚手に施釉され、貫入が見られる。外面は露胎を呈す。17は体部が緩やかに内弯し、大きく開いていく皿である。内面から外面下方まで青みがかった白色釉が施釉され、全体に細かい貫入が見られる。下方から高台にかけては露胎である。18は筒型椀である。体部は大きく開くように立ち上がり、中位から屈曲してほぼ直立気味に丸く収められた口縁部に至る。内面から外面の高台際上方にかけ淡黄色の釉が

施釉される。高台部は露胎ある。体部には口クロ目、内外面に細かい貫入が見られ、また見込みに重ね焼きのトチン痕が残存する。19は京焼椀の下半部である。内面から外面の高台際上方にかけ灰白色の釉が施釉される。体部外面に丁寧な口クロケズリ痕が残存する。高台部は露胎。また見込みには焼成時のトチン痕が残存する。20・21は唐津産の刷毛目塗りの小椀である。胎土は淡赤褐色の硬質。体部は高台からほぼ上方に向けて内弯しつつ緩やかに立ち上がって口縁部に至る。白泥による直線の刷毛目が内外面に施され、上から透明釉がかけられる。21は見込み部分が釉剥ぎで、重ね痕が残存する。22は同じく唐津産の刷毛目大鉢の破片である。口縁部が「く」字状に屈曲し端部は上方へ摘まみ上げて丸くおさまる。内面に波状文が描かれる。23は関西・堺系の播鉢の破片である。胎土は明赤褐色で長石、石英など微細石粒を多く含む。端部形態は上端部が突出し、丸くおさまる。外面端部下端は下方へ下がり気味に丸くおさまる。外面の縁帯が二条の凹線を、内面端部も一条の凹線を有し、凹凸状を呈す。口縁部は備前の同時期のものと同じような形態を持つものである。24は信楽産甕の破片である。胎土は長石、石英など微細石粒を含む軟質。口縁形態は口縁上端は広く平坦を保ち、外端部は丸みもった三角形に肥厚させ、外に突出する。内端部は丸みをもって内へ突出する。施釉は内面端部より外面上方と内面上方に暗褐色の鉄釉が施されている。外面は全体に施釉を施されるものであろう。

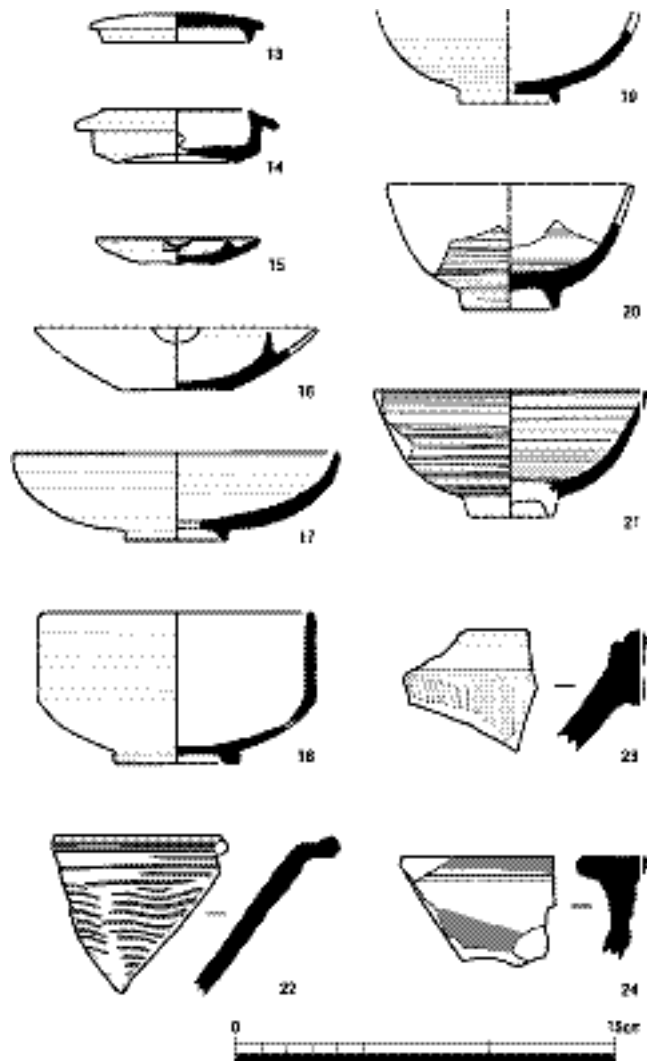


図9 SK1出土施釉陶器類実測図(1:3)

上記した施釉陶器類は土師器・土製品同様に江戸時代後期の中期(18世紀前半から19世紀)の時期幅を想定している。

(3) SK1出土の伊万里染付(図版4、図10)

25は伊万里染付の仏飯器である。杯部は口縁部が内弯しながら上方へ延びる。底部は蛇の目高台で削り込みは浅く、底部凹部に輪トチン痕が付着する。施釉は高台底部を除き全面に施され、草花文が描かれている。26は伊万里染付の筒形椀で小振りのものである。体部は僅かに内傾しながら反り気味に立ち上がっていく。施釉は全体に施される。装飾は内面口縁下端に二重圈線が巡

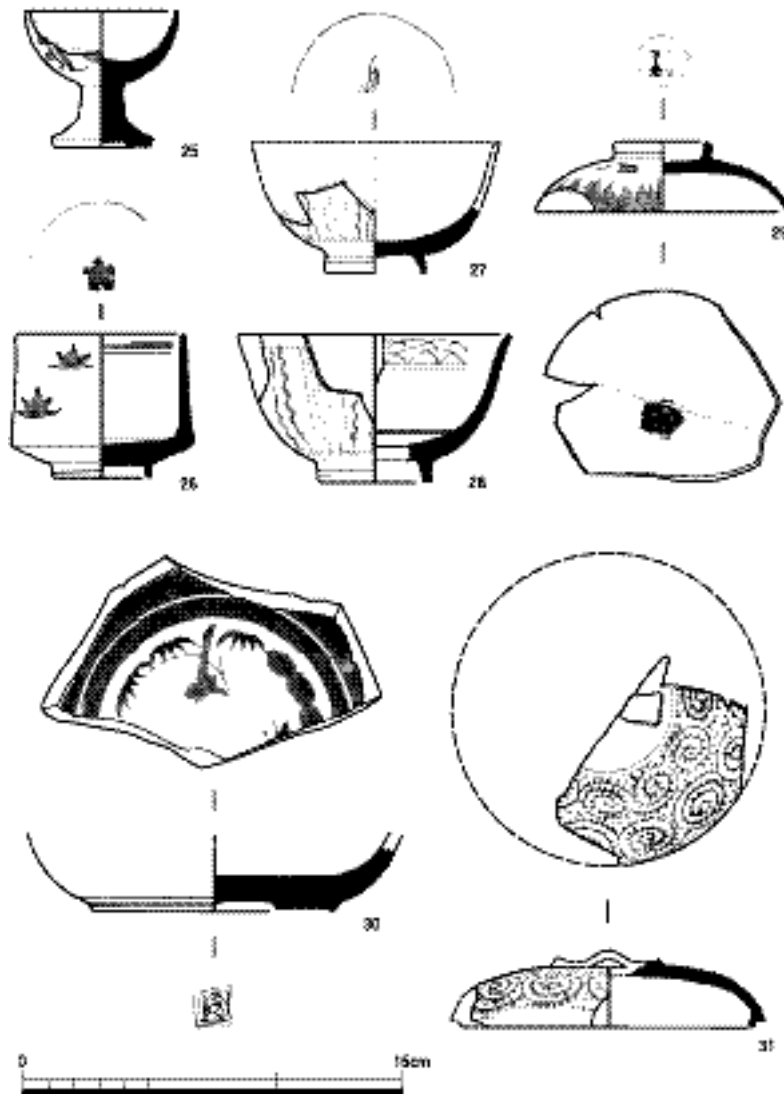


図10 SK 1 出土伊万里染付実測図(1:3)

に二重圈線が巡り、その間に波線文と直線文が描かれる。高台部側面にも二重圈線が巡る。29は伊万里染付碗蓋である。体部は緩やかに内弯して口縁部に至り、口縁端部には発色が悪いが銹釉が施釉されている。体部外面には雨降り文が丁寧に描かれ、内面見込みに比較的密な五花弁コンニャク印判が施される。体部上方には一重圈線が巡る。つまみ部は輪高台が付き、内面周縁に一重圈線、その中心に手書きで粗く「大明年製」と書かれている。また高台側面には二重圈線が巡る。30は伊万里染付の鉢である。高台は蛇の目凹形高台で凸部は釉剥ぎである。凸部には重ね焼きの輪トチン痕が見られる。装飾は見込みに松竹梅文が描かれ、外面体部下端に二重圈線が巡る。高台凹部に二重方形の中に渦福が描かれる。31は伊万里染付鉢蓋である。体部は大きく開き中位からきつく内弯し、内へ屈曲する稜が付き、返り端部に至る。蓋上面には短冊状のつまみが付く。装飾はつまみ周縁に二重圈線が巡り、稜の上端に一重圈線が巡る。その間に比較的丁寧にタコ唐草文が描かれる。また焼継の痕跡も一部に見られる。

伊万里染付類も江戸時代後期の 中期(18世紀前半から19世紀)にかかる時期幅に入るものと想定している。

(4) SK1 出土の石製品 (図版4・5)

SK1からは下層より石製品の五輪塔32、法塔の宝珠にあたるもの33、法塔の軸部にあたるもの34、石仏35・36・37などが出土している。

五輪塔32は斑れい岩を石材に使用したもので基礎にあたる地輪がない。空輪・風輪・火輪・水輪の四輪を一石で造ったものである。33は石材に斑れい岩を使用した、法塔の宝珠・請花である。法塔の軸部34も斑れい岩を石材に使用したものである。形態は俵状で頸部がすばまり上部に笠部、相輪が乗る。下部には台となる基礎を備えるものである。また軸部正面には上が狭く下に広がった形の花頭窓と呼ばれる枠が陽刻され、中に戒名が「佛法僧梅月法薫信女」と印刻されている。そして左側面には「寛文十二年曆」(没年1672年)と彫り込まれ、右側面に「子 十二月三曆」(没日子の年12月3日)と彫り込まれてあった。戒名の最後に信女と記される事から、故人は女性であったと判断できる。石仏は蓮華座に座ったものが35・36、立像37がある。石材はどちらも砂岩を使用している。座像は両方共に左掌に右掌をのせ印(禅定印)を組み、上には形態から薬壺と思われる物をのせている。これは薬壺を安ずる薬師如来像の可能性がある。立像は基礎の台が付くであろう地藏菩薩と推定されるもので、左腕を曲げて前に出している。左掌は欠損しているが宝珠をのせていたように思われる。右腕は斜め前に差し出し、一部は欠損しているが右掌を下げているのが見てとれる。なお石仏は3体ともに首から上が欠損したものであったが、わざと頭部を取り除き遺構に放り込んだのか、二時的に頭部が欠損したものを破棄するために放り込んだのかは不明である。

以上図示した遺物について述べたが、それ以外のSK1出土遺物には伊万里の赤絵、伊万里碗、備前・丹波焼締播鉢、棧瓦、軒平瓦、軒丸瓦、金属製品キセル、石製品砥石などがあつた。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代前期	土師器・須恵器・灰釉陶器・黒色土器・瓦	5箱		0箱	5箱
室町時代 ～桃山時代	須恵器・焼締陶器	1箱		0箱	1箱
江戸時代前期 ～末期	土師器・土製品・施釉陶器・磁器・焼締陶器・瓦	6箱	土師器7点、土製品5点、施釉陶器11点、焼締陶器1点、染付7点	0箱	5箱
	石製品	3箱	五輪塔1点、法塔2点、石仏3点	0箱	0箱
	金属製品	1箱		0箱	1箱
計		16箱	37(4箱)	0箱	12箱

5. ま と め

調査地は平安宮の北西隅に該当し、北方官衙群地域と呼ばれ、官衙としては漆室に推定される場所である。過去に3度仁和小学校校内で調査を行ったが、いずれも宮内の明確な遺構を検出するに至らなかった。当調査地は平安宮の西限大垣推定線が南北に通る事から、宮の西限大垣に関する隍、築地跡、路面、建物跡等の検出が期待されたが、近世以降、小学校造成に至るまでに大きく攪乱を受け遺構などが削平されており、残念な結果に終わった。しかし、前調査と今回の調査においても、平安時代前期の瓦片の散布や微量ながらも土器の出土が見られる事などからして、当地周辺には平安京造営当時に関連する遺構があったであろう事は想像にかたくない。また西方官衙群調査において、平安京西限を対象とした1978年（昭和53年）の正親司跡の調査、また1985年（昭和60年）、1990年（平成2年）の右近衛府跡調査が行われており、それぞれ南北方向の隍を検出している。残念ながら今回の調査においては調査区の限界から隍を確認することはできなかった。

これまでに北方官衙群地域で官衙内を区画する施設、建物などの明確な遺構は現在まで検出例はない。近世以降、広範囲にわたる土取りが行われた事がこれまでの調査により明らかとなっている。言い換えればこの一帯は未解明な地域といえる。西方官衙群も造酒司を除き同様の状況である。しかし、地点によっては、遺構の削平を免れて平安時代の遺構、整地層が検出されている。今後この周辺での調査成果を蓄積、分析する事により未解明な北方官衙群、宮の西限に関する歴史の様相がよりいっそう明らかになっていくものと考えられる。

註

- 1) 鈴木廣司「漆室跡」『平安宮』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 2) 辻 裕司「平安宮鼓吹司跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1989年
- 3) 長戸満男「平安宮正親司・漆室跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2000年
- 4) 平田 泰「正親司跡」『平安宮』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 5) 梅川光隆「平安宮西限」『平安京跡発掘調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986年
- 6) 辻 裕司「平安宮西限(1)」『平安京跡発掘調査概報』平成2年度 京都市文化観光局 1991年
辻 裕司「平安宮西限(2)」『平安京跡発掘調査概報』平成2年度 京都市文化観光局 1991年
- 7) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきゅううるしむろあと							
書 名	平安宮漆室跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2001-4							
編 著 者 名	大立目 一							
編 集 機 関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所 在 地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発 行 所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2002年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきゅう 平安宮 うるしむろあと 漆室跡	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区 おんまえどおりいちじょう 御前通一条 さがるひがしたてちょう 下る東堅町	26100		35度 01分 20秒	135度 44分 21秒	2002年1月 21日～2002 年2月27日	120㎡	老人セン ター建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安宮漆室跡	都城	江戸時代後期	ピット・土壙・井戸・落ち込み遺構	土師器・施釉陶磁器・焼締陶器・軒丸瓦・軒平瓦・瓦・土製品・石製品・金属製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001 - 4

平 安 宮 漆 室 跡

発行日 2002年9月30日

編 集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発 行

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 三星商事印刷株式会社

住 所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961